

第 16 回ふれあいトーク（農業の振興）会議記録

- 1、日 時 平成 25 年 3 月 19 日（火） 午後 7 時から 8 時
- 2、場 所 Jun Blend Kitchen（高岡市農業センター（アグリピア高岡）内）
- 3、出席者 若手農業者（12 名）
市長、農業水産課長、広報統計課長
- 4、会議次第
 - (1)市長挨拶
 - (2)出席者紹介
 - (3)高岡市の農業施策について説明
 - (4)意見交換

.....

意見交換

参加者

- 今日は皆さんに提供しているものは、もち米をつくっており、もち米を使ったワッフル、モッフルで、黒糖を練りこみ、圧をかけたスイーツである。去年もち米がコメより安く、また、冬場はもち米の消費はあるが、それ以外の季節のもち米の利用ができないかと考えて作った。もう一品はクロムスビという、コシヒカリと黒い米を掛け合わせた米を練りこんだケーキである。イタリアに料理研究に行ったスタッフが作成したもので、イタリアでは米を利用したスイーツは一般的で、取り入れた。ケーキ上のドライフルーツは、果物を乾燥機にかけたもので、家で取れる野菜やフルーツを乾燥機で加工し、販売している商品である。農業を始めて 7 年であり、2 年前にレストランを開業し、今は、レストランをベースに仕事をしている。

参加者

- 農業を志したのは、中学 3 年の進路選択の際に自分にしかできないことをしたいと考え農業を志した。農業高校の後、農業者大学校に進学し、現在に至る。

参加者

- 営農組合に務めて 10 年になる。出身は名古屋市で、実家が米屋で消費者の立場で米を見ていたが、米の作り方を知らなかった。父がコメマイスターの資格を持っておりその話を聞いているうちに、店頭の米に興味をもったのがきっかけで農業の道に進み、富山の営農組合に就職した。営農組合では桃を取り入れることになったが、長期間の世話ができる若手が他にいなかったため自分が桃の担当となった。

参加者

- 酪農をしている。高校三年生で進路変更し、技術短期大学で学び、北海道の大学に就職し大学の付属牧場で 1 2 年間酪農を行い、7 年前富山に帰り酪農を行っている。地元の農家 3 軒と共同で米も作っている。

参加者

- 1 年の期限で緑のふるさと協力隊の活動で高岡に来て、高岡の生活が気に入り、営

農組合に就職した。高岡は農地がきれいに区画整備されており、集落営農のような土地利用型農業でたくさんの土地を使いながらうまくやっていきたい。緑のふるさと協力隊の取り組みが大変よく、今後も長い目で続けていってほしい。

参加者

- 卵の生産と販売を行う有限会社を営んでおり、親鳥は小矢部市で育てており、高岡にはひな鳥の育成と販売拠点を置いている。現在6次産業化に取り組んでおり、全国的にも珍しい県内産米を主原料とした餌で鶏を飼育し、卵を生産し、ジェラートなど生産する事業に取り組んでおり、昨年農政局でも採択を受けた。

参加者

- 旧福岡町で牧場を営んでおり主に肉牛を飼育している。はじめは牧場をする気がなかったが家業を手伝うことになった。各種団体等と連携し肉の販売などを行っているなかで、今は自主的な取り組みを何かできないか考え勉強中である。

参加者

- 農園を営んでおり、トマト・ニラを栽培している。モーツアルトの音楽の周波数には、トマトの成長を促す効果があると言われていることから、ハウス内にモーツアルトの音楽を流してトマトを育てている。来年頃、農家カフェを開きたいと考えている。家業の農園を守っていききたい。

参加者

- 水稻とユリの切り花をあつかっている。就農して15年目になる。元々水稻農家だったが複合経営を考え切り花を取り入れ、市場に出すだけでなく今は直売やアグリッチの直売所に出品している。

参加者

- 4年前脱サラし、戸出でチューリップを作っている。はじめは大きい組織に入ったが生涯の仕事、職人的な仕事をしたいと考え就農した。将来、山で放牧をしたいと考えており、今は技術を磨くための期間と考えている。土地利用型農業で収益をあげようとする、今後土地が余って供給過多が生じる。その土地を利用し放牧したいと考えている。

参加者

- 小学校で学校菜園をやった時の楽しさがきっかけで農業に従事している。将来的には手に職をつけるため農業関係の資格を取りたい。高岡市には資格取得の支援などをしてもらいたい。

参加者

- 東京の就農相談フェアで富山県ブースで今の職場を紹介された。農業は、今後土地面積が増えていくので、効率的にやっていく必要がある。福岡小学校の食育活動にも携わった。

市長

- 資格を取るための支援など、市がどんな手伝いをすればいいか、意見を聞かせてほしい。

- ・ モーツアルトを聞かせたトマトはおいしいと感じたし、特徴がある。人に語れる農業は良いと思う。
- ・ 日本の農業環境は厳しいが、今の農政は競争できるベースを作り応援しようとしている。頑張ればやっていけるという環境を作っていきたい。こういった語り合う場での意見を大切にしていきたい。

参加者

- ・ 若手の農業従事者が少ない。若手を増やすためには、農業をやりたいと思わせることが大切。今の農業は生産するためのものという面が強いが、やりがい重視することも大切。

市長

- ・ 農家の人の中にも、土に触ること、経営することなどそれぞれ得意分野が異なり、それぞれの得意分野ややりたいことで力を発揮することがいいのではと考えている。経営が成り立つことが大切である。

参加者

- ・ 日本より海外の方が農業の魅力という点では進んでいる。アメリカに農業研修に行った際、地域支援型農業としてC S Aシステムという、消費者と生産者が関わり、助けあうシステムがあると学んだ。消費者は、生産者に2月に1年分の野菜代金を支払い、生産者は4月からの生産費用に充て、1年間野菜を消費者に届けるシステムである。生産者は資金繰りが安定し、消費者は安定して農産品が供給される。消費者が農業を支援し、生産者は畑で教室の場を提供するなど、生産者と消費者が魅力を感じながら農業に関わるあり方が大切と考える。
- ・ 農業の海外研修をあっせんする組織があるが、費用が150万円程度かかる。支援のシステムがあるとありがたい。

市長

- ・ アメリカのC S Aシステムは、一種の投資システムのように面白い。一方、自分がどんな取り組みをしているか、情報を発信することも大切になる。

参加者

- ・ 情報の発信は大切である。アメリカの研修先では、農業の70パーセントをアートととらえ、倉庫もアーティスティックなものを建てるなど、魅力ある農業を作ろうとしていた。

参加者

- ・ アーティスティックな取り組みなどは、発信されず自己満足で終わることが多いが、うまくいかなくても発信することが大切である。結果が得られたものや、成功するものしか発信しないことが多いが、取り組みの過程を発信することで、取り組んでいる楽しさを共感することができ、結果的に農業の楽しさを発信することができる。

市長

- ・ 農業にアートを取り入れるという考えは大変面白い。モーツアルトを聞かせたトマトにも共通すると思う。結果重視とプロセス重視という考えがあるが、プロセスは

大切と考える。アートにもプロセスがあり、プロセスを見せることで投資の価値があると思わせることができると思う。プロセスを公開し、発信する仕組みを作れないか、次の展開を考えたい。

参加者

- ・ 楽しんでやっていれば、後継者としてやってみたいという人が出てくる。
- ・ 生産効率を上げることだけにスポットを当てた農業は、若い世代に楽しく映らない。効率ばかりを重視せず、かつての農業のように、1年を通じて米、野菜、家畜など様々なもの扱えば、楽しさを感じるポイントが見つかると思う。

参加者

- ・ 山羊を飼い、乳を利用し、乳酸飲料を作ったりしている。農園に山羊を見にくる人が増え、交流が生まれ楽しい。また、山羊を覗きにきた人が、農産物を買っていくなど、直接の売買につながるので、嬉しい。

市長

- ・ 様々な意欲的な取り組みが広がっていく良い話が聞けて嬉しい。
- ・ 6次産業化のきっかけ作りをしたい。きっかけができれば、より大きな県の事業の制度を活用するなどできると思う。

参加者

- ・ 6次産業化を始めた。取組のなかで特に思うのは、生産者は、作ることができるが、それが消費者に求められるものなのか、わからないところがある。こだわりのものづくりと、製品の安定供給の両面のバランスが大切であり、消費者が、選択できることが大切である。そのためにも生産者と消費者の双方向で情報発信がされる体制が必要と考える。
- ・ 情報発信は、継続が大切であるが、農業従事していると、発信に時間が割けないため、初めのうちは発信のためのチャンネルを行政やマスコミが担ってくれと嬉しい。HPで順に取り上げてもらうなどし、年に1回発表の場などを設けてもらいたい。

市長

- ・ ぜひ情報発信の場を考えていきたい。
- ・ 行政の視点は行政サービスを提供する視点に偏りがちになるが、生産者の立場からの意見を取り入れ、ニーズに合った仕組みに直していきたい。

参加者

- ・ 酪農は、小矢部市や氷見市、南砺市などは後継者がいるが、高岡は廃業している農家が多い。酪農は初期投資がかかるが、離農したところは建物の設備が整っている。施設がまだ壊されないうちに、これらをPRし、酪農の後継者探しや新規就農につなげてはどうか。酪農家が増えれば、相談や協力など互いに刺激し合うことができる。
- ・ 国吉にたい肥センターがあるが、後継者がいなくなれば施設も無駄になる。
- ・ 仕事をしながら後継者を探すのは難しいため、行政で設備をPRするなど、協力し

てもらえるとありがたい。

- ・ 勝木原で複数の農業者で共同で牧場を活用する取り組みを検討している。

参加者

- ・ 新規就農のためには機械が高価で参入しにくいと思われるが、農業を業として成り立つためだけでなく、楽しみでやるといった入口も必要。福利厚生や福祉、教育などと絡めて農業を活用していけば、農業の楽しい面が感じられるのではないかな。利益を上げようと思うと敷居が高くなるが、楽しむための気軽に農業にふれあえる機会を作っていければよい。

参加者

- ・ 機械を使うと高いが、機会を使わず農業をする方法もある。

市長

- ・ 後継者や新規就農者の候補者に向けた施設のPRや、勝木原の牧場の取り組みなどをPRしていきたい。

参加者

- ・ 養鶏では鳥の育成環境を重視するとコストがかかるが、自社では高齢な人も従業員として働いており、支えられている。退職後の人などの生きがいづくりの受け皿として農業を使ってはどうか。お金に変えられないものと効率とのバランスを考えていきたい。

参加者

- ・ 営農組合は高齢化が進み70代の人が多く、50～60代前半の人は農業をやりたいようないようだ。自分は楽しく感じ、就職した。楽しさを感じたり伝えることが就農につながると思う。今年は17歳の人営農組合に就職した。

参加者

- ・ 最近、営農組合に若い人の就職が増えた。理由として、若い世代が多く入りやすかったと言っていた。また、1年を通して農業をやると、どこかで必ず楽しいと感ることがある。辛いことがあっても、そこを過ぎると、楽しいと感じられ、農業を続けていくことができる。

市長

- ・ 良い話を聞くことができた。情報を発信しマッチングすることが大切と考える。行政でも協力したい。ネタを拡散してほしい、というものがあったら教えてほしい。

以上